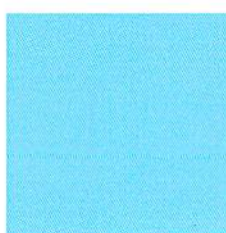
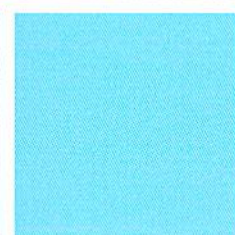
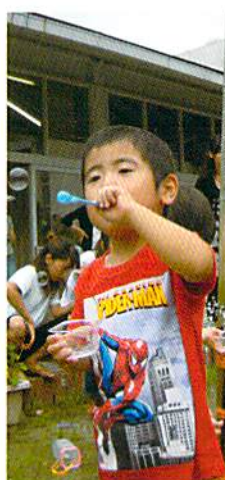


保 育 子 育 て 研 究 所 年 報

2007年度

桜花学園名古屋キャンパス保育子育て研究所

—第5号—



目 次

I シンポジウム：子育て支援サークル・ボランティアのつどい

子育て支援サークルを支援するとはどのようなことか

—「子育て支援サークル・ボランティアのつどい」の経験から—

【神田英雄】・・・・・・・・・・ 2

保育と子育て支援の昔と今— 子育て支援センターを中心に —

【大村恵子】・・・・・・・・・・ 10

人と人がつながる工夫で地域の子育て力を育む

【小嶋玲子】・・・・・・・・・・ 15

II 子育て交流会の現在

保育者養成校における子育て支援— 親のニーズと子育て交流会 —

【清葉子・宍戸洋子】・・・・・・・・・・ 19

2007年度 子育て交流会・赤ちゃん交流会・記録・・・・・・・・・・ 25

III 保育実践報告

楽しい表現活動が育てる2歳児クラスの仲間関係

【島田真由美・川元麻由美】・・・・・・・・・・ 31

「できる自分」に気付くには— A男の姿を追って— 【河野 彩】・・・・・・・・・・ 38

資料

2007年度 事業報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

I

シンポジウム

子育て支援サークル・ボランティアのつどい

子育て支援サークルを支援するとはどのようなことか — 「子育て支援サークル・ボランティアのつどい」の経験から —

神田英雄

はじめに

各地に生まれ活躍している子育て支援サークルには、財政的基盤が脆弱でありながらも、子育て中の父母と子どもの健康な育ちを応援しようとするボランティアの人たちの誠意が詰まっている。保育子育てを総合的に研究し支援することを目的として設置された桜花学園大学保育学部・名古屋短期大学保育科の保育子育て研究所は、このようなグループやボランティアの人たちを応援することを当初からの主要な目的のひとつとしてきた。独自に行ってきた「子育て交流会」は、その一環である。しかし、自らが実施するだけでは、支援対象は限定される。保育者養成大学にとっての子育て支援とはどのようなことか。他の支援サークルをどう応援すればよいのか。方法を模索しながらも、具体的な手立てが見つからずに設立後4年が経過した。

2008年2月28日に実施したシンポジウム「一緒に楽しいことを広げましょう—子育て支援サークル・ボランティアのつどい」(以下、「つどい」と記す)は、各地の支援サークルを援助するための最初の取り組みである。大学としての子育て支援のあり方を模索する手探りであった。本稿では「つどい」の報告を行うとともに、「つどい」に取り組むことによって見えてきた、支援サークルを支援する意味を述べていきたい。

1.「子育て支援サークル・ボランティアのつどい」の概要

(1)「つどい」の目的と実施時期、実施場所

「つどい」は、託児グループや子育て支援グループが相互にエンパワーメントすることを目的としたシンポジウムである。2008年2月28日の午前10時～12時に実施された。



場所は桜花学園名古屋キャンパスの教室。音楽表現等の授業を行う教室なので、固定机や椅子は配置されていない。参加者がカーペットの上に座って参加することにより、くつろいだ和やかな雰囲気を持てるように配慮した。

託児は実施しなかったが、子ども連れで参加する人のために保育学生たちが待機し、教室の後方で子どもたちの相手をするようにした。

(2) 実施主体と呼びかけ媒体

主催は保育子育て研究所であるが、託児グループや子育て支援グループのニーズにあった集いにするため、準備段階で大学近辺で活動しているグループの代表者を招き、企画案を練り上げていった。準備会は2度実施され、参加グループの代表者がそれぞれ集い当日のパネリストを務めることになった。

参加の呼びかけは、主としてチラシ・ポスターによる。愛知県内市町村の子育て支援担当機関や児童館、保健センターなどにチラシ・ポスターを配布し、掲示をしていただいた。

(3) 参加者

参加者は74名であった。基本的にはチラシのみの宣伝であったことを考えると、予想を超えた参加者数であったといえるだろう。

参加者の属性別内訳は右表の通りである。

子育て支援サークル関係者	26
行政関係者、保育者	7
大学関係者	6
学生	2
所属未記入	13
パネリスト	7
研究所スタッフ	8
託児学生	5
合計	74

(4)「つどい」の内容

総合司会は研究所員の田端智美、シンポジウムのコーディネーターは同・神田英雄が担当した。

言葉による報告と討論に終わらせないため、高須裕美(研究所員、名古屋短期大学保育科の音楽表現の教員)による「みんなで楽しもう」を、シンポジウムの開始前、中間、終了後と、3回はさんだ。歌や身体を使った遊びによって、楽しさを参加者の間に広げ親しさが高まるようにと意図した時間である。

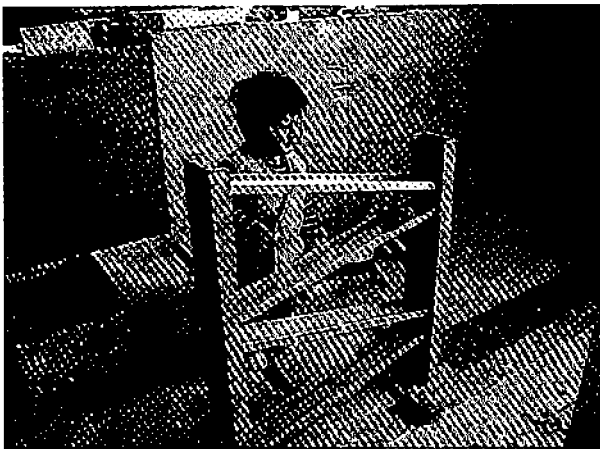
当日の流れと報告内容は以下の通りである。

10:00 あいさつー保育・子育て研究所の紹介(保育子育て研究所長・田中義和)

10:05 みんなで楽しもう1(高須裕美)

10:15 シンポジウムの趣旨説明(神田英雄)

10:20 報告1 親子の広場・あんだんて(東浦町) パネリスト:山本和枝さん



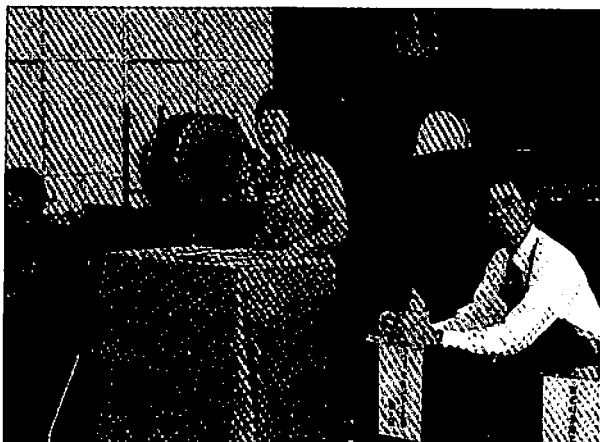
地域の人たち(大工さん、栄養士さん)の協力を得た経験を報告。子育て支援サークルを父母や子育て経験者、保育士だけの取り組みに限定せず、さまざまな技能を持った人たちの協力関係にまで広げることができることを示した。

10:30 報告2 ひまわりっこ(豊明市) パネリスト:上野規子さん



ボランティアサークルが行政(保健センター)とつながり活動してきた経験を報告。オリジナルの人形劇形式で、楽しく報告された。

10:40 報告3 みどり子育て応援団 パネリスト：荒川直子さん、川崎龍さん（ブックセンター名豊緑店 店長）



子育て情報誌作成、普及活動の報告と、その活動が地域の書店の無償協力を得て展開されたことを報告。書店長である川崎さんからは、事業者も子育て支援に協力したい意思をもっていること、しかし、その方法が分からないということが語られた。協力を求めるサークルと協力する意思を持っている事業者のコラボレーションのひとつの典型例である。

10:55 みんなで楽しもう2(高須裕美)

11:00 報告4 NPOたんぽぽ(名古屋市) パネリスト：桜井真弓さん



30年の歴史をもつ託児グループの経験を語る。活動が継承するためには、実践技術の継承だけではなく、子育て支援に向けた精神が新しい世代のボランティアに伝えられていくことが必要であったという報告。

11:10 報告5 子育て交流会(保育子育て研究所) パネリスト：清葉子さん・水谷真理子さん



清さんからは、大学という特別な場で行う子育て支援の特徴が報告された。学生参加、保育を研究する大学教員の協力、大学という広い敷地と駐車場があることのメリットを生かしうるなどの特徴である。水谷さんからは、最新の折り紙遊びの実技が参加者に伝えられた。

11:25 質疑と交流

各地のボランティアサークルの自己紹介が自発的に、かつ、活発に行われた。育休中の父親からの発言もあり、多様な人が多様な立場で多様な個性を持って子育て支援をしていることが示された。全体として、楽しく和やかで、共感的な雰囲気の中で発言が続いた。

11:45 みんなで楽しもう3(水谷真理子)



11:50 これからの課題と終わりの言葉(研究所員・穴戸洋子)

2. 子育て支援者が集う意味は何だったのか

(1) アンケートに見る参加者の感想

シンポジウム終了直後に記入をお願いした自由記述形式のアンケートには、38名の方が回答してくださいました。「今後、子育て支援グループやボランティアの人たちが元気に活動するために、どのような企画があればよいでしょうか。」という問いに、「こんなにすばらしい会だったので、これ以上のことは考えられない」という趣旨の記述もあり、全体として参加者の満足度は極めて高かったと考えられる。

主な感想は、以下の通りである。

- ①楽しかった。お楽しみがあったのがよかった(大多数)。
- ②はげまされた、元気になった(多数)。
- ③いろいろな人とのつながりがあること、いろいろな人に助けってもらうことが大切だと感じた(多数)。
- 企業の方がいらしているのにはびっくりした(複数)。
- ④「こんな場があるんだ!」と、いい意味で驚きだった。
- ⑤発表される方々の熱意、やる気を感じ、…自分たちでもいろいろできるようになるのかなと思えた。
- ⑥あったかい雰囲気でシンポジウムできたのが本当によかったと思うし、次につなげるためのよい場になったと思う。
- ⑦ほっとした気持ちになった。

(2) 子育て支援者が集う意味は何だったのか

「子育て支援サークルの支援」という課題への対応として真っ先に思い浮かぶのは、支援技術や託児技術の伝達講習ということであろう。しかし、今回の「つどい」とアンケート結果から見てきたのは、別の内容であった。それは、支援者同士が知り合うこと自体に意味がある、ということである。

アンケートの大多数には、「楽しかった、元気になった」という言葉があった。なぜ元気になったのだろうか。前項④の「こんな場があるんだ!という意味で驚きでした。」という回答の「驚き」とは、何だったのだろうか。

その答は、前項⑥の「あったかい雰囲気」や①「お楽しみがあったことがよかった」にあるように考えられる。

核家族化と地域のつながりの希薄化によって、育児技術の自然な継承ができにくくなっていることが、今日の子育ての大変さの中心的要因であると考えられてきた。たしかにそれは重要な問題ではあるが、同じように重要な別の要因についてはあまり触れられていない。それは、子育てが常に評価にさらされていることである。

1歳の幼児をもつある母親は、次のように述べている。

公園デビューとか、親どうしの支え合いということがよく言われます。確かに、第一子が0歳の時は一つひとつが不安で、赤ちゃんをもつ親どうしが雑談して情報を交換することで心強さを得ることができました。けれども、1歳を過ぎて、子どもが歩いたり話し始めたりすると、状況が変わりました。育児の不安はまだあるけれど、0歳の時のような何もかも分からない不安ではなくなり、育児に対する多少の自信も出てきます。そうすると、親どうしの会話も変化してきました。そろそろ体操教室に通わせようとか、小さいうちから何かの習い事をさせようか、等の会話が多くなります。そして「お宅ではまだ通っていないの?」という言葉に、「熱意が足りないんじゃない?」というニュアンスが込められるようになってきました。私は子どもはのびのびと遊ばせたいと思っていたのですが、習い事をせずに遊ばせていると育児の手抜きをしていると見られている気がして、お母様方と関わるのが苦しくなっていました。だから、公園にも、他の親子がいない時間に行くようになっていきます。

また、2歳の幼児の母親は、次のように語っている。

私の長男は、少し落ち着きがなくて、友だちのおもちゃをサッと取ってしまうことがあります。すると、周りの子どもの親たちが、私たちをだんだん避けるようになってきました。子ども達がお互いの家に遊びに行ったりしてきたのですが、最近では、私たち親子に遊びに行きたいと言われないうに、私に距離を置いているように感じます。私の育児が放任主義だから子どもに落ち着きがないのだという声も、まわりのお母様方から聞こえてくるようになってきました。私は、できるだけ人と関わらないで子育てをしようと思うようになっていきます。

育児は、それ自体手間暇がかかるものであるが、今日では親どうしが相互評価の目で見つめ合っており、それが育児をいっそう息苦しいものにさせている。母親たちの中にある他者評価の目は、他者もまた私を評価しているに違いないという「監視の目」を強く自分に意識させ、自らを縛る作用もする。

本来、子どもは多様な気質を持っている存在であり、知らない人や知らない場所に強く警戒する子どももいれば、物怖じせず新しい場所に入っていく子どももいる。友だちが遊んでいるおもちゃが魅力的に思えて欲しくなることも、子どもの自然な感情である。しかし、今日では、そのような子どもの個性は、親の育児を評価する指標と見なされるようになってしまった。どのような子どもが「いい子」なのかという判断基準が極めて狭くなり、子どもの多様性を許容するゆとりが親世代から（あるいは、社会全体から）失われてしまっている。

先に紹介したアンケートの「こんな場があるんだ!という驚き」「あったかい雰囲気が本当によかった」「ほっとした気持ちになった」という回答には、そのような窮屈な評価の目から自由になれた気持ちが込められている、と言ったら、言い過ぎであろうか。

今回のつどいは、パネリストのそれぞれがたくさんの工夫をして報告してくださった。各サークルの活動状況を写真で報告する掲示のほか、報告2のパネリストである上野さんは、この日のために人形劇まで作って報告してくださった。報告5で水谷真理子さんは、自らが学んできた新しい折り紙遊びを参加者全員に伝えようと努力してくださった。「みんなで楽しもう」も好評であった。それらは参加者に対するサービス精神であるが、サービス精神とは、参加者への温かい配慮に他ならない。

また、報告1と報告3ではたくさんの人たちが子育てを応援してくれている実例が示され、報告1のあんだんての活動を援助してくださっている看護師さんは、「つどい」の参加者として顔を見せてくれた。報告3では、書店の店長さん自らがパネリストになって思いを語ってくださった。子育てを評価するのではなく、温かい目で応援している人がたくさんいる、ということが、「つどい」全体で示されたのである。

「つどい」は、パネリストの報告内容と、報告の仕方との両方によって、子育て支援の意味を参加者が感じ取れる集まりになった。

育児が評価の目にさらされている現実の中で、「つどい」は、評価ではなく思いやりを持って育児を援助しようとしている人々がたくさんいることを示す場となった。それが、「支援者同士が知り合うこと自体に意味がある」ということの意味である。

子育て支援ボランティアの人々は、「他者の子ども」を健やかに育てるために活動している人々である。他者の子どもを評価し批評する存在ではなく、まして、他者の子育てを批判する存在でもない。打算なく、全ての子どもの健やかな成長を願っている人たちの集まりが支援ボランティアの集いである。同じような気持ちを持っている人たちがたくさんいることを知るによって湧いてくる希望。それが、「つどい」がもたらした結果であった。

参加者のアンケートのほとんどに書かれていた「楽しかった」「元気になった」という言葉は、テレビ番組を見て「楽しかった」というのと同じ意味ではない。人々の温かさにもれた喜びと誠意が伝わりあった楽しさ、そして、自分もその中の一員である喜びが、「楽しかった」「元気になった」の意味ではなかっただろうか。

競争と相互評価によって日々苦しみながら生活している実態は、子育てだけに限らない。仕事から私生活までの広範な領域において、常に競争させられ、批判におびえながら生きているのが現代人である。子育て支援グループの交流がお互いの暖かな気持ちを交流することであったとしたら、それは子育てを間にはさんで、私たちが人間性を取り戻すための一つの試みであったのかも知れないとさえ、思うのである。

子育て支援グループは、現実にはさまざまな具体的な困難や課題をかかえている。最大の問題点は財政的な厳しさであろうが、運営や活動を次の世代に引き継いでいく課題、託児に関しては、子どもどうしのトラブルをどう見てどう解決していくのかといった問題（それは、子どもの親どうしの人間関係にも影響を与える問題でもある）、具体的な遊びの技術や子どもを見る目を託児者自身が身につけていく課題など、たくさんの課題がある。各グループがそれらの課題をどう乗り越えていったのか、という経験交流は大切であろう。しかし、経験交流の意味は、解決策を他のグループに示してもらうことにあるのではない。あるグループでうまくいった方法が、別のグループでも同じように役立つとは限らないからである。さまざまな課題は、それぞれのグループが自らの努力で解決していくべきことがらである。したがって、支援者の交流を、解決策を伝え合って見つけ出していく場と考えてはならないであろう。この点において、「悩みを出し合おう」という交流会の持ち方は妥当ではないと考えられる。

支援者たちの誠意を伝え合うことによって、さまざまな困難を抱えながらも、それぞれの支援者が元気を与えあい、自らの課題を自ら解決していこうというエネルギーを生み出すこと。そこに、支援者の集いの意味があるのではないだろうか。

おわりに

「保育者養成大学が行う子育て支援とは何か」という課題意識に基づいて手探りで行った「つどい」であったが、指先が確かな何かに触れたように思う。この感触が子育て支援に関する大学の役割に結びつくものかどうか、まだはっきりとは分からない。今回の小さな経験をどう生かしたら地域における大学の役割を果たしていくことができるのか。次の一步を、ボランティアの人たちと共に考え、実践していきたいと思う。

保育と子育て支援の昔と今

— 子育て支援センターを中心に —

大村恵子

(1) 子育てシンポジウムの感想

先日の子育て支援シンポジウムには大変感心した。シンポというから硬い報告が続くのかと思って行ったら、各サークルの楽しく、熱い実演と報告で本当に楽しかった。マットの上に座りながら、どの親子連れも楽しそうに参加しておられた。市町村を超えた自由な交流がとても心地よく感じた。よく幅広い地域の子育てサークルに声をかけられたことだと感心した。これがどこかの市が主催となると、これだけ多彩で自由な交流はできにくいだろう。このような自由な交流を実現できるのは、大学の研究所の特徴と言えるかもしれない。本学の保育の専攻科の卒業生が、今三重県で子育てサークルを立ち上げ、ファシリテーターとして成長したいと二人の子育てをしながらがんばっているの、次回の報告は三重県にまで広がるかもしれない。

広がることだけが目的ではないが、これだけユニークでパワフルなお母さんたちやボランティアの方たちが地域の特性に合わせながら工夫して活動しておられると、そこから学ぶこと、盗めるアイデアがたくさんみつかると思われる。

また、各地でこれだけ多くの方たちが子育ての輪を広げておられることを知ると、広ければ広いだけ安心感が増し、はげまされる。

しかし筆者にはそういう状況を見て感慨深いものがある。私的な面も含め、少し歴史的な状況を振り返ってみたい。

(2) 保育と子育て支援をめぐる歴史的流れについて

筆者が本学の教壇に立ち始めた35年ほど前（'72年）筆者が集団で子どもを育てることの大事さを講義した次の時間には、近隣の幼稚園長が非常勤講師として子どもは家庭で育てるべき、と講義しておられた。

名古屋では、それからまもなく著名な研究者が保育園で長時間あるいは長期間保育を受けた子どもは将来発達に問題が出てくる、家庭で育つのが一番、という研究を発表され、長らくそれは愛知県の保育界に影響を与えた。名古屋だけではなく、3歳までは家庭でといういわゆる3歳児神話は、心理学者により世間に広く流布し、子育てを園が公的に引き受けることには消極的で、母親や家庭に責任を帰するという時代は'98年の厚生白書による3歳児神話の否定まで続くのである。（しかし、その後も影響は公私ともに根深く続いている。）その間、行政が取ったスタンスはしばしば保育は必要悪という捉え方であり、園児の入所枠は少しずつ広がってはきても十分ではなく、少子化の現在でもまだ待機児童が解消しないという状況がある。

そのような状況の中で保育園の保育者も80年代半ばごろまでは、在園児を保育することだけで手一杯

であったが、その後地域で母親により孤独に育てられている子どもたちの状況が必ずしもよくないということに気づき、先進的な保育者は地域に出て家庭を訪れ、各地で家庭で育つ子どもの実態調査⁽¹⁾を始めた。このころからであろうか、家庭で育つ子どものほうが親に十分手をかけてもらって育ち、園で育つ子どものほうが忙しい親に目と手をかけられていないのではないか、という考え・偏見が揺らぎ始めた。そして、90年代から、家庭で子育てをしている母親に関して、育児不安や子育てノイローゼ、マタニティブルーそして虐待などの言葉がどっと増え始めた。それから後は現在に一直線につながる。家庭や地域で孤独な子育てをしているお母さんたちを支えるために、子育て支援の事業が始まり、在園児しか対象にできなかった保育園・幼稚園がまさに門戸を開き、園庭開放や未就園児の親子教室などを始めるようになった。しかし予算が少なく特別の施設やスタッフ、教材などが用意されにくく、1999年⁽²⁾と2002年⁽³⁾に愛知県・岐阜県の子育て支援センターを調査した我々の研究では、多くは園内の空き部屋などを支援室としていた。だが、園が家庭にいる子どもたちにまで目配りするようになったことは進展と言えるし、また一方でそれだけ家庭にいる母親の状況がせっぱつまったものになっているということでもある。

’72年から保育科に勤めだし、70年代半ばから子どもを保育園に預けて働き続けてきた筆者自身の体験から言うと、70年代は首もすわらない赤ん坊を他人に預けて働くとはどういう親だという目で周りから見られたものである。長男が0歳のとき結膜炎になって近くの眼科を受診した際、高齢の男性医師がこんな小さな子を保育園に入れて…と批判的に言ったのを覚えている。考えてみると、長男も次男も産休明けからお世話になった共同保育所や小規模保育園の嘱託医はどちらも女医さん＝働く母親であったのは偶然ではないだろう。

現在、保育者を希望して入学してきた学生たちの多くも、子どもが好きだからなおそうであるかもしれないが、わが子は自分の手で育てる方がいいと思っている。それを2年間の教育の中で、自分も他人の子を愛情をもって育てる保育者になり、わが子も集団のなかでより刺激を受けることによって豊かに育つということのある程度理解して卒業させるのが一つの到達課題だと筆者は考えている。

そのように、子育ては専ら母親が家庭で行うのが当然という考えは、戦後随分長い間日本の中で定着してきたので、今のように子育て支援の手が曲がりなりにも差し伸べられ、母親一人で子育ての責任を負わなくてもいいのよ、という世の中になったことには感慨深いものがあるのも当然であろう。

(3) 子育て支援センター見学から

筆者自身がいくつか各地の支援センターを調査や見学のために訪れた中で、特徴的だったことを述べてあとの参考にしたい。

まず初めに、筆者が他の研究でよく訪れる三重県の離島のことを述べる。漁業で成り立っているこの島にも子育て支援施設がある。軒先がぶつかり合うように密着して住んでいる、今でも近所づきあいの濃厚な地域であるのにも関わらず、役所の看板に子育て支援のポスターをみたとき、こんな所でも若い孤独なお母さんがいるのだと強く印象に残った。たしかに3年前から、知り合いの漁師の方が船を降り、慣れない勉強をして資格を取って高齢者のデイケアセンターを作られたことと相通ずるものがある。家族、親族、近隣のネットワークの強いこの島でもやはり、高齢者介護のニーズがあるのだ。島外から嫁いできたお嫁

さんなら尚更、家族や近隣の関係が密だからこそ、他人に聞いて欲しいこと・聞きたいことがあるだろう。

さて、いくつか実際に訪れた子育て支援センターのことを述べよう。地域にたくさんある子育てサークルについては直接ほとんど知らないので、そのようなサークルの育成やバックアップをしている支援センターについて述べたい。

先述したように、1999年と2002年に行った愛知と岐阜の30数カ所の子育て支援センターの調査の中で、条件的にも格段に進んでいる豊田市などを除いて、日進市の例を取り上げよう。1999年の調査では、日進市で初めて子育て支援センターを作ったのは、お寺のそばにある私立の日東保育園であった。園舎は古いですが、乳児室には床暖房がしてあったり、細かい所にも気配りされた園であった。子育て相談の部屋もない状況だったが、50代の女性園長の熱意は素晴らしいと感じた。それは、在園児に田植えから稲刈りまで経験させるということだったが、同じ事を週2回来る親子教室の子どもたちにも経験させていることにも現れている。

2002年に再び訪れた時、新園舎の青写真が出来ていたので、子育て支援の部屋を見て、お母さんたちが自由にお茶を飲めるコーナーの設置を奨めると、すぐ取り入れられた。

その他、この2県の支援センターについての調査の中で、豊田市などの充実した例外的な場合を除いて学べる点は、先進的なわずかのセンターが相談や講座に来ないお母さんこそニーズを持っていると、家庭訪問を行っているということだった。さらに、今日はこちらの教室、明日はあちらの講座と、子どもを連れ歩いているお母さんたちもいるので、お母さんたちが仲間を誘い、子育てサークルを作って、自主的に活動を始めるバックアップを心がけているセンターは多くあった。また、子育て支援が結局子育てを母親に帰することになってはいけないという視点から、土曜日に父親向けの企画を入れている所は多くあったが、中でも岡崎市は広報誌の表紙を毎号お父さんと子どもの自然なツーショットで飾り、父親の自覚を促そうとしている所に意識の高さを感じさせられた。

2つの県の他のセンターも保育園との併設が多かったが、予算は少なく、施設もスタッフ配置も不十分な所が多かった。しかし、それでも多くのセンターは園の保護者に向ける顔よりも、もっと暖かく優しくお母さんたちに接しておられるように感じたのはなぜだろう。

さて、2005年度にはかの有名な武蔵野市の「0123 吉祥寺」⁽⁴⁾と横浜にある「おやこの広場びーのびー」を見学させて頂いた。前者の方は、設立に至るまで著名な研究者や建築家、行政その他の専門家でもって、いくつもの委員会を作り、実に綿密に知恵を結集させて作られた支援センターであり、施設設備、スタッフ、活動内容ともあまりに立派なのでここでは紹介を割愛する。高級な住宅街に作られた「0123 吉祥寺」とは対照的に、そこから学んではいるが商店街の中に作られたのが「びーのびーの」である。ここは駅に近い商店街の空き店舗を借りて作られ、商店街の人たちに愛されまた若い母子や支援の若者が来ることで商店街が活性化するという共生関係にある。NPO法人格をとったが、やはり経営的な苦勞が大きく、市からの助成金は貴重な財源である。2000年の開設以後、2005年にはもう一つ広場を立ち上げる予定になっていた。この「びーのびーの」は民家の一室を改造したこじんまりした「広場」であったが、全国の商店街に立地する子育て支援施設についての調査を行い、商店街と子育て支援団体で新しいまちづくりを提案するという志の高い団体であった。子育て支援の先達や研究者、ボランティアのシニアや大

学生たちなど多くの人たちに支えられながら活動が続け、2003年には立ち上げの経過や活動内容をまとめた本⁽⁵⁾も出版している。子育て支援は地域による子育てを目指しているわけだが、シャッター通りとなった商店街を活性化させる他の動きとして、愛知県でも商店街の空き店舗に学生が交代で喫茶店を開くというまちづくりが名古屋学院の先生によって行われている。このような活動と同じく、まちづくりを視野に入れた子育て支援という活動は、新しい貴重な活動として注目される。

最後に今年3月に訪問した、東京都江東区の「東陽子ども家庭支援センターみずべ」について述べたい。このセンターは神愛保育園の園長であった新澤誠治氏がこのような子育て支援センターが必要だと思っていた時に、ちょうど江東区の計画に組み込まれ、氏の考える理念やプログラムが生かされ、氏は公設民営のこのセンターの初代所長になられたのである。氏は、「死線を越えて」で有名なキリスト教社会運動家の賀川豊彦によって1951年に設立された、貧しい人たちのための神愛保育園に大学卒業後飛び込んで行き、若くして園長となり様々な苦勞をして園を経営する⁽⁶⁾。そして、神愛保育園自体の中に、子育て支援センターを作ったのだが、後に神愛を退職後この「みずべ」の所長になる。今は神愛から移ってきたベテランの保育者が2代目の所長を務めておられるが、「みずべ」の4つの基本理念は共生・共育・共創・共有であり、その根底にはキリスト教精神が窺える。もともとここは区の内職センターだった所で、川の傍にある少し古い感じの建物だが、「みずべ」の中に入ると一変する。ここかしこに、花や手作りの抜群のセンスの掲示物や装飾品が飾られ、部屋自体明るいトーンの内装で、心が和らぐ。しかし、もっとも羨ましいのは全体の広さが400㎡あり、80㎡くらいのプレールームの隣に各種講座や会議用の体験学習室(60㎡ぐらい)があり、子どもたちがのびのび遊べる広さが確保されていることだった。他にも、絵本コーナーは床暖房はないものの、絨毯の下にホットカーペットが敷いてあり、直に床に座って本を見るときも暖かく配慮されていた。また、受付のあるロビーは広く、その窓際でくつろげる喫茶コーナーもゆったりとあってあった。ボランティアさんたちの顔写真も壁に紹介されていたが、筆者が訪問した土曜の午前中には年輩の男性ボランティアの方がエプロンをつけ、ハーモニカを吹いておられた。所長のお話ではお父さんたちの参加も多いこと、また多様で熱心なボランティアの方たちの支えなしにはやれないが、ボランティアを長く続けていくのはむずかしいということだった。

「みずべ」の見学を終えて、比較的近いので神愛保育園まで行ってみた。その日はちょうどこの園の卒園式であり、見学は出来なかったが佇まいだけでも知りたかったのだ。卒園式を終えた親子が玄関の前で何組も記念撮影をしていた。園には周りにフェンスもなく、園が地域に向かって素のままで立っているという感じだった。一階のプレールームで卒園式が行われたらしく、その後のにぎわいがまだ残っていることが外の道からも窺えた。園舎は大きくなく地味な色に塗られていて、全体にこじんまりとしていた。周りの住宅もいかにも下町らしく、軒下に植木鉢などを丹念に育てている町で、その中にじっくり保育園がとけ込んでいた。50年以上前に賀川豊彦が作り、その後新澤誠治氏が引き継いだ頃は、もっと荒れていた町だろうが、今はこざっぱりとした町となって息づいているという感じだった。

(4) まとめにかえて

以上、調査や見学などを通して特徴のある子育て支援センターについて述べてきたが、最後に本学の保育子育て研究所に関連して述べたい。

「東陽子ども家庭支援センターみずべ」から学ぶことは、何よりも子どもたちがゆったり遊べる空間の保障ということ。本学に新設された7号館一階にプレールーム一室ができたが、従来のスペースとどのように折り合って使うべきか、甚だ難問である。ぽつんと一室だけ提供されても、事務室や会議室、相談室などが併設されてなければ、大変使い勝手が悪いだろう。

さらに、「みずべ」については新澤氏が『子育て支援 はじめの一步』⁽⁷⁾で詳しく紹介しているように、深い理念を持ち、多彩な支援活動が行えているのは、十分な経験と力を持った専任スタッフがまず存在しているからである。それは、センター内の壁に飾られたお知らせや装飾物などの、丁寧でセンスの良いことにも反映していると思われる。ボランティアの方も大勢登録しており、様々な力の必要性も感じたが、やはりなんといっても毎日そこで頭と体と心を使っている専任スタッフが複数必要なことを痛感した。子育て相談にも常時応じられる体制の保障が必要であろう。

大学と短大に保育科を持ち、学内に1000名もの保育学生を抱える我がキャンパスならば、保育子育て研究所も地域への貢献活動を充実させていくために、施設設備、スタッフ、予算の面でさらに整えられていく必要がある。そうして、ますます研究活動と子育て支援活動を発展させていかななくてはならない。

参考文献

- (1) 一氏昭吉他 「地域に出て知った私達の役割」『現代と保育17号』 ひとなる書房 1986年
- (2) 一盛久子他 「愛知県・岐阜県における地域子育て支援センター事業の実態について」
『保育士養成研究』第17号 全国保育士養成協議会 2000年
- (3) 神野三千代他 「地域子育て支援センター事業の発展状況と今後の課題—愛知・岐阜の場合—」
『名古屋短期大学研究紀要』第41号 2003年
- (4) 柏木恵子他 『子育て広場の「0123 吉祥寺」』 ミネルヴァ書房 1997年
- (5) 奥山千鶴子他編 『おやこの広場びーのびーの』 ミネルヴァ書房 2003年
- (6) 新澤誠治 『私の園は子育てセンター』 小学館 1995年
- (7) 新澤誠治 『子育て支援 はじめの一步』 小学館 2002年

人と人がつながる工夫で地域の子育て力を育む

桜花学園大学保育学部 小嶋玲子

1. はじめに

2008年2月28日に、保育子育て研究所主催の子育て支援サークル・ボランティアのつどい「いっしょに、楽しいこと広げましょう!」が開催されました。筆者は、保育学部で子育て支援論の授業を担当している一教員として参加しました。会に参加して、それぞれの子育てサークルが、人と人のつながりを広めたり深めたりする、さまざまな工夫を行なっていることを強く感じました。それらの工夫について、以下に3つの視点(地域の人をつなぐ工夫、参加者をつなぐ工夫、支援者同士をつなぐ工夫)から述べてみたいと思います。

2. 地域の人をつなぐ工夫

誰かを支援する場合に心がけなければならないこととして、その人のもてる力を引き出したり、なんらかの要因でうまく働いていない力を機能的に働くよう手助けしたりすることがあげられます。子育て支援の場合も、支援者は、被支援者として想定されている親や家族に直接かかわって、それぞれの親や家族が本来もっている力が十分働くように手助けしたり、潜在的な力を引き出したりする手助けをすることは言うまでもありません。しかし、子育て支援の場合は、それに加えて、被支援者としては想定されていない、つまり子育て支援を必要としていない地域の人々にも働きかけ、その方々の力も引き出し、相互扶助力や地域の子育て力を高めていく役割も必要となってきます。今回のつどいで特に印象に残ったのは、それぞれの子育て支援サークルが、自分たちだけで家族を支援するのではなく、地域のさまざまな人の力を引き出し、人と人がつながり支え合う関係を上手に培っているところです。これは、人手や費用の面でいろいろな方の力を借りないとサークル活動が成立しないという要因からの苦肉の策かもしれません。たとえそうであったとしても、今回活動を発表された子育てサークルでは、人と人がつながり支え合う関係をつくることで、子育て家族への支援だけでなく、地域全体の子育て力の向上に役立つ活動をされています。子育て支援において、支援者が直接対象者を支援する段階を第1ステージとすれば、今回の子育て支援サークルのつどいでは、地域の子育て支援が、支援者、被支援者という枠だけにはとどまらず、地域住民がそれぞれ支えあって子育て支援にかかわる第2ステージに入っていることを強く感じました。

東浦町の子育て支援サークル「親子の広場・あんだんて」の活動発表の中で、子育て支援活動の一環として料理講習のボランティアをされている方は、「親子の広場・あんだんて」の主催者を「詐欺師」「ペテン師」ということばで表現されました。もちろんこれは一種の逆説表現で、愛情と親しみをこめてこの言葉を使っておられたのですが、なぜ、こんな表現をされたかと言うと、「親子の広場・あんだんて」の主催者が、「言葉巧みに」、つまり、その方の心に響き心を動かすような言葉や態度で子育て支援のボランティアをお願いし、いつの間にか、その方がそのボランティア活動を熱心に行なうようになり、その上喜びまで感じるようになったということです。「親子の広場・あんだんて」の活動発表では、さらに、大工ボランティア

の方の素晴らしい作品も紹介されていました。このように、子育て支援サークルが、さまざまな力をもった地域の人々の力を引き出し、上手に活かして、地域の子育て力を育てているのです。

また、名古屋市緑区の「みどり子育て応援団」の活動発表では、「ブックセンター名豊緑店」店長さんが、「みどり子育て応援団」の応援団として壇上で話されました。子育てマップを店頭で販売することから始めて、今では、お店で絵本の読み聞かせなども行なわれているようです。店長さんは、「企業や店舗は、子育て支援に協力したいと思っても、どういう形で協力していけばよいか分からないのではないかと話されていました。つまり、子育て支援サークルや母親たちの働きかけ次第で、お店も子育て家庭の味方になってもらえるということです。そして、各店舗が子育て支援に関心をもち協力してくれるようになれば、もっと子育てしやすく住みよい町になっていくことでしょう。

この項で述べてきたように、地域の人々の力を借りたり、地域の人々の潜在的な力を上手に引き出したりしながら、地域の人がつながるように工夫することが、子育て支援の第2ステージに入った子育てサークルや子育て支援関係者には、今後さらに求められてくると思います。

3. 参加者をつなぐ工夫

さて、人と人をつなぐというのは、「言うは易し、行なうは難し」です。それぞれの子育て支援サークルは、初めて参加する子どもたちや親、保護者が参加しやすいように、また、それぞれの参加者が、お互い知り合いになれるようにさまざまな工夫をしています。発表の中にも、サークル運営において、参加者が参加しやすいような居心地の良い空間や時間づくりの工夫についてのコメントがありました。

今回のつどいにおいても、知らない人同士が集まり、そしてお互いに交流するわけですから、会を成功させるためには主催者側の工夫が必要です。ここでは、今回のつどいで筆者が感じた主催者側の工夫を述べたいと思います。特にシンポジウム間に3回に分けて挿入された「みんなで楽しもう」の時間において、参加者同士をつなぐ工夫がありました。このような工夫はどのサークルでも行なわれていることだと思いますので、筆者が感じた主催者側の工夫を述べることによって、各子育て支援サークルの主催者が行なっている人と人をつなぐ工夫をみていきたいと思います。ただし、筆者は主催者側の人間ではありませんが、直接今回の運営にかかわってはおりません。当日のみの参加でしたので、筆者が理解した主催者側の工夫と直接運営に当たった保育子育て研究所のスタッフが意図した工夫とが一致しているとは限りません。これから述べることは、主催者はこんな意図でこういう時間を作ったのかなという、あくまでも筆者の思いです。

まず、会は、「はとぼっぼ体操」から始まりました。子どもが一緒に参加する会ですから、子どもも参加できることが前提となっています。したがって子どもにも親近感のある曲である必要があります。また、子どもだけでなく、大人の参加者にとっても初めての場所、知らない人が多いところでは、身体が緊張していますから、簡単かつ軽い体操で身体をほぐすことは緊張緩和に有効です。次に「幸せなら手をたたこう」の歌を歌いました。誰でもが知っている歌を歌う、つまり、声を出すことは、緊張緩和のみならず聞くだけの受動的態度から、歌う(声を出す)という能動的態度へ構えの変化を促します。それが参加者からの発言を促すという効果も持ちます。単にその場に居るだけの参加(受動的参加)から自分の意見を述べると

いう能動的参加へのきっかけづくりにもなるのです。また、与えられた歌詞をただ歌うだけでなく、「幸せなら、〇〇たたこう」と、たたく場所、つまり〇〇の部分の歌詞の決定が何人かの参加者に委ねられました。このような応答的な場を作ることで、参加者の参加意識を高めることになります。さらに「幸せなら(お隣の肩)たたこう」という歌詞を入れることで、座席が隣の人の肩に触れるきっかけをつくり、隣の人との距離感を少なくする工夫もありました。

休憩をはさんで会の途中で行なわれた、全員が寝転んでその上を布で覆い、その布が上下する活動は、筆者も取り入れたいと思うほど、参加者の表情がなごんでゆったりした時間になりました。前半のシンポジウムで母親から離れていた子どもたちも、この場で母親の胸に抱かれ、母親と一緒にやさしい時間を過ごすことができて、親子ともども後半のシンポジウムに気持ちよく臨むことができたのではないのでしょうか。

最後の「みんなで楽しもう」の時間に、折り紙で作ったコットントン(折り紙ドミノ)は、自分の作ったものだけではドミノとしては完成せず、複数の人の作ったものを並べなければならないものでした。つまり、参加者同士が協力しなければならない活動でした。そして、自分の作った折り紙の動きが、次の人が作った折り紙の動きに連動して、ドミノが完成されていきました。まさに、自分の活動が次々に影響を及ぼし、人と人のつながりを実感できる場でした。会の最後を飾るのにふさわしい活動だったと思います。

ただ、「みんなで楽しもう」企画の内容が多すぎた感がありました。熱意ある教員や支援者は、できるだけ多くのことを参加者に提供したいと考えます。しかし、「みんなで楽しもう」の時間が長すぎて、シンポジウムの時間が押してしまったことは事実です。このあたりの時間配分の臨機応変さは必要でしょう。発表者も熱意のあまり時間オーバー気味で、後半は、時間を気にしながらの進行となってしまう、終了時に、なんだかあわただしい感じが残ってしまったのが唯一残念でした。フロアの参加者ももっとゆっくり発言をしたかったのではないかと思います。また、時間があれば、より多くの方の発言をお聞きすることができたように思います。筆者は、職業柄、こういった企画の主催者側に回ることが多いですが、今回一参加者として参加することによって、運営上の時間配分は非常に大切であることを改めて感じました。特に子どもと一緒に参加している場での進行は、間延びしないゆったり感が重要だと思います。ただし、これも「言うは易し、行なうは難し」なのですが。

4. 支援者同士をつなぐ工夫

「今回の交流会は、各地でそれぞれ活動している子育て支援サークルが一堂に介して交流することで、何か新しいことが生まれるかも知れないという意図で行なわれた」と司会者から説明がありました。また、お互いに知り合って、お互いに元気になることも意図されていました。このようなつどいをもつこと自体が支援者同士をつなぐ一つの工夫です。

自分たちの活動や経験をこういう場で発表するためには、振り返りの作業が必要となります。自分が関与している子育て支援サークルの活動や経験を分かりやすく人に伝えるためには、サークルの目的や活動内容などを再度確認する必要があります。その確認作業のために、サークル内の活動者がさまざまに意見を出し合い、サークル員同士の意見交換も活発になされたことでしょう。そのことによって、サークル員同

士のきずなやつながりがより深まったのではないかと推測しています。発表のために、サークル内で活動している人々が、改めて自分たちの活動について振り返り、意見交換することは、サークル員同士のきずなやつながりを深化させるだけでなく、よりよいサークル活動をおこなうための示唆を得るためにも役に立ったのではないかと推察します。

また、自分たちの子育て支援サークル活動をより多くの人に理解してもらうためには、伝える工夫が必要です。どんなによい活動をしていても、それを人に伝え理解してもらわなければ、賛同者や協力者を得ることはできません。子育て支援サークルの社会的認知度を高め、より多くの協力者を得るために、広報活動は欠かすことができません。それだけでなく、支援が届かない人に支援を届けるためにもサークルの存在を知ってもらわなければなりません。広報という点で、発表者もフロアーからの発言者も自分たちの活動を効果的にアピールする工夫が見られました。自分たちの活動を地域の人にかに伝えていくか、そういう日々のサークル員の工夫が、今回の発表に活かされていたのだと思います。

さて、最近は、「支援者や援助者に対しても支援や援助が必要だ」ということが言われるようになってきています。善意と熱意で行なっている子育て支援も、時として、予想もしない反応が被支援者から返ってきたり、支援者の思いと被支援者との思いに齟齬が生じたりして、支援者自身が落ち込んだり、元気がなくなったりすることがあるからです。その上にNPOの子育て支援サークルですと、活動場所や人手の確保、資金繰りなどに心をさかなければなりません。子育て支援サークルを運営するためには、さまざまな苦労があるわけです。そういったさまざまな苦労に対するストレスマネジメントやエンパワーが、支援者・援助者に対しても必要であるという認識が広まってきています。今回のつどいは、主催者が意図しているようにサークル運営の苦労をねぎらい、お互いが元気になるという意味合いもあったわけです。フロアーの参加者も含め、他のサークルの方々と交流することで、支援者同志が苦労を分かち合い、喜びを倍加させ、お互いの知恵や工夫を学び合う機会となったことでしょう。そして、たくさんの元気をお互いにもらいながら、さらなる活動のエネルギーとすることができたことと思います。

5. おわりに

子育てしやすい社会をつくるために、まず、地域の大人たちがつながることで、大人自身も成長し、子どもたちの健やかな成長を見守ることができるのではないのでしょうか。そして、そういう地域の中で子どもたちのつながりや仲間意識が生まれ、子どもたち自身の健やかな成長が育まれてくことと思います。人と人のつながりが希薄になっている現代社会だからこそ、子育て支援サークルの方々がさまざまに取り組んでおられる、人と人のつながりを大切にする工夫が、地域の子育て力向上のための大きな力になっていることを実感したつどいでした。

Ⅱ 子育て交流会の現在

保育者養成校における子育て支援

— 親のニーズと子育て交流会 —

清 葉子 六戸洋子

5年目を迎えた子育て交流会

地域に開かれた大学として、また保育者養成大学として、2002年に保育子育て研究所を立ち上げ、その活動のひとつとして2003年度より、0歳児から3歳児の未就園の親子が集う「子育て交流会」をキャンパス内で実施してきました。密室のなかで孤独に育児をしている母親たちに、子どもを遊ばせながら親どうしの交流をはかる場を提供し、子育ての不安を解消し、楽しく育児ができるような支援をすることがねらいです。

1年目の「子育て交流会」は、月1回の実施で、保育者1名が担当し、平均11組の親子が参加しました。保育専攻科の学生が保育室の壁面やおもちゃ、牛乳パックで大型すべり台等の製作を担当しました。

2年目は、参加者の回数を増やしてほしいという要望もあり、月4回実施し、保育者も2名になり、ボランティアの母親の手伝いも加わり、毎回、平均23組の親子が参加しました。保育専攻科生と保育学部生が子どもと一緒に遊んだり、ペープサートやパネルシアター、絵本などを持って参加するようになりました。

3年目は、さらに参加者が増え、新たに保育者2名と事務担当者が加わり、保育者4名と事務担当1名とボランティアの母親5名の体制ができました。毎回、平均24組の親子の参加がありますが、時には40組、50組という日もあり、ピアノ練習室を改造した子育て交流会室は、身動きできない状態になります。そこで、キャンパス内の付属幼稚園のホールで実施する日を、年6回程、設けるようになりました。

4年目は、参加者のニーズに応え、0・1歳児対象の赤ちゃん交流会と、定例の開催日以外に、子育て交流会室の開放日を月1回設けました。この、赤ちゃん交流会には毎回平均18組、自主交流会にも毎回10組の親子が参加しました。また、子育て交流会の予定や絵本・手遊びなどの紹介を盛り込んだ「さくらんぼ通信」を発行するようになりました。

5年目は、こうした活動を踏襲し、保育者を養成する大学の特色をいかし、学生参加と、大学の教員の専門性をいかした活動を「子育て交流会」のなかに取り入れることを追求してきました。



これまでの5年間で、子育て交流会を126回実施し、延べ3,116組の乳幼児の親子の参加がありました。その他、子育て交流会室の開放日を24回実施し、351組の参加と、赤ちゃん交流会を16回開催し、330組の多数の参加がありました。少しずつ地域の子育て支援として根付き、今年度の参加者は多い時には70組を越す日もありました。このように子育て支援の場を求めるニーズの高さをうかがい知ることができます。(表1)

表1 これまでに行ってきた子育て支援の実施回数と参加者数

	子育て交流会	参加組数 (延べ組数)	開放日	参加組数 (延べ組数)	赤ちゃん交流会	参加組数 (延べ組数)	学生の参加数 (延べ組数)
2003年度	12回	138組					72人
2004年度	31回	741組					134人
2005年度	23回	558組					90人
2006年度	36回	931組	9回	101組	9回	164組	176人
2007年度	24回	748組	15回	250組	7回	166組	146人
計	126回	3,116組	24回	351組	16回	330組	618人

近年、地域にさまざまな「子育て支援」の場が増え、支援のあり方も多様化してきています。今回、改めて参加した保護者にアンケート調査をし、親のニーズを分析し、これからの保育者養成大学における子育て支援のありかたをさぐってみました。

アンケート調査の目的と方法

調査目的：子育て交流会に参加する保護者対象に子育て支援にかかわるアンケート調査を実施し、その結果から保護者の子育て支援に対するニーズを探る。

調査方法：選択・自由記述式アンケート調査 実施期間：2007年10月～12月

調査対象および人数：「子育て交流会」に参加した保護者101名 回収率：100%

研究結果

1、アンケート回答者の状況について

本学の子育て支援に参加している親子の状況は、30代の母親が中心で、また子どもは第1子の一人っ子が一番多く、子どもの年齢は1・2歳児が多く参加しています。

図1 母親の年齢

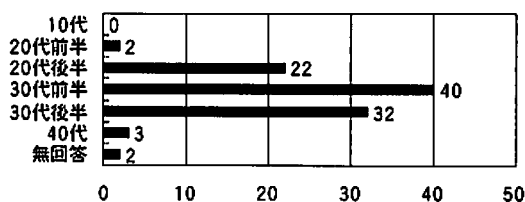


図2 子どもの数

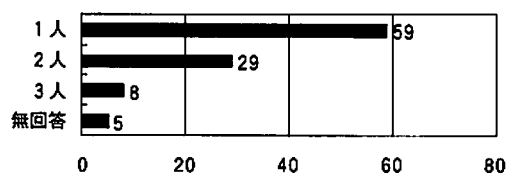


図3 子どもの年齢

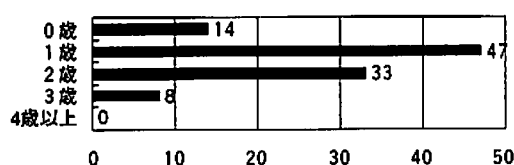
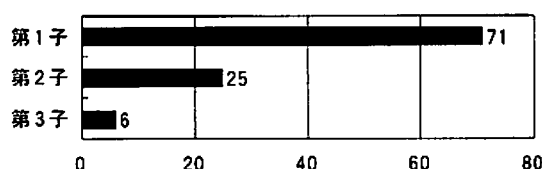


図4 参加している子どもは第何子か



2、地域の子育て支援事業について

これまでに地域で行われている子育て支援事業には、81%が参加したことがあると回答しました。(図5) また、初めて参加した時の子どもの年齢は0～1歳未満が61名、1～2歳未満が13名であり、ほとんどの方が子どもが2歳までに子育て支援事業へ参加しているようです。(図6) 今までに参加・利用したことのある子育て支援事業は、主に幼稚園・保育園や保健所・市町村が実施しているものの利用者が多く、(図7) 利用頻度は、月に数回から週に1・2回でした。(図8) また、子育て支援事業の実施情報は、友達などからの口コミによるものが一番多く、他には市町村の広報誌、子育て情報誌などから得られているようでした。(図9)

図5 地域の子育て支援事業への参加状況

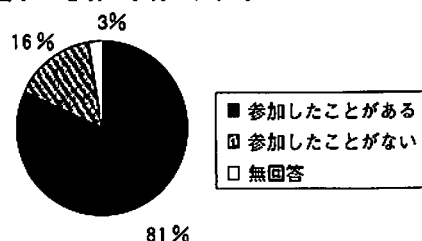


図6 初めて参加した時の子どもの年齢



図7 今までに参加・使用したことのある子育て支援事業

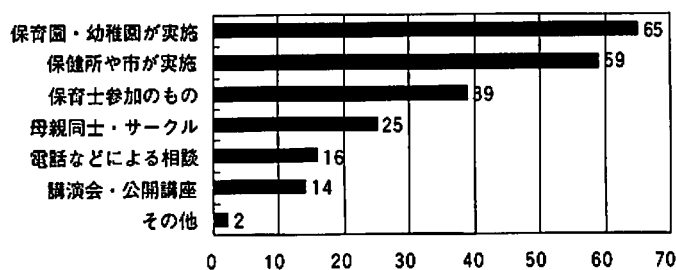


図8 地域の子育て支援事業の利用頻度

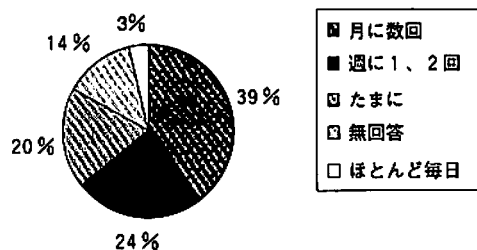
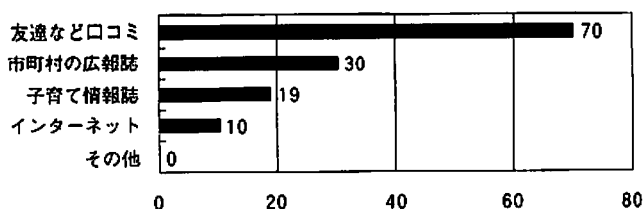


図9 どのようにして子育て支援の場の情報を得るか



3、子育て支援事業に参加して感じていること

親子で子育て支援事業に参加してプラスになると感じたことはどのようなことか質問したところ、主な回答(複数回答)は、①「子どもが同年代の子どもと遊ぶ経験を持てる」82名 ②「子どもとの遊び方や手遊びなどを覚えられる」69名 ③「気分転換になる」67名 ④「母親同士の友達(ママ友)ができる」63名でした。(図10)

また、子育て支援に参加してよかったことがあるかの問いに86%が「よかった」と回答しました。(図11) その理由としては、大きく分けて ①「子育てに関する悩みや不安が解消された」 ②「親子ともに友達ができる」 ③「家庭では経験できないいろいろなことが体験できる」 ④「気分転換になる」 ⑤「子育てに関する情報が得られる」の5点についてあげられていました。

反対に、子育て支援に参加して「困ったことや嫌だ」と感じたことがあると回答した人は18%みられ、(図12)その理由としては、2つの側面からの理由でした。1つ目は、「グループができあがっていて、輪に入れなかったこと」「話し相手がなくて寂しい思いをした」という参加者自身の同じ場における疎外感を抱いたという側面、2つ目は、「マナーを守らない人がいる」「子どもをほったらかしにして話に夢中になってる方がいる」と他の参加者のモラルや態度に関する側面でした。子育て支援事業の実施者は、参加者がこのような点に対して不安・不満などを抱いているということを念頭に置き、支援の場やルール作りをしていく必要があると思われます。

図10 子育て支援事業に参加してプラスになると感じる事

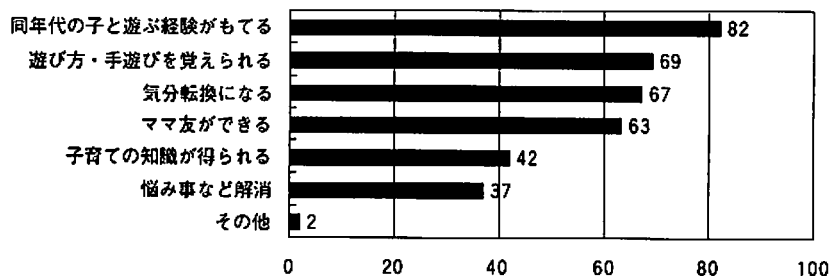


図11 子育て支援に参加してよかったことがあるか

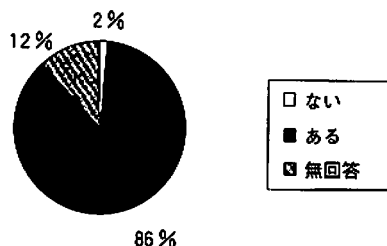
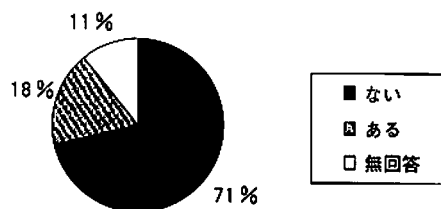


図12 子育て支援に参加して困ったことや嫌だったことがあるか



4、子育て支援事業へ求めていること

どこの子育て支援事業へ参加するかを選ぶ際に、重要なポイントはあるかと質問したところ、ポイントの有無に差はほとんど見られませんでした。が、(図13)「ある」と回答した人のあげたポイントは、「場所」「徒歩か車でいけるところ」「駐車場の有無」といった場所へのアクセス面からと、「スタッフの雰囲気」「内容」「子どもたちの年齢」といったプログラム面があげられました。また、どのような子育て支援に魅力を感じ、参加したいと思うかの問いには、「保育士や栄養士がいて、気軽に相談できる」といった専門家がい

ること「親子遊びがある」等親子体験型プログラムが充実しているところとの回答が得られました。また、ほとんどの人が交通の便がよく、駐車スペースが確保されているところを選んでいているという結果も得られました。(図14)

図13 参加する際の選ぶポイントの有無

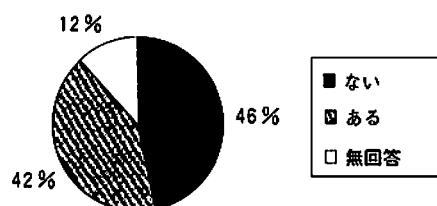
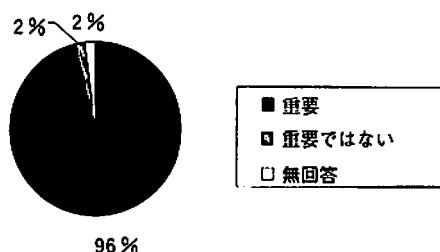


図14 参加する際に駐車場・交通の便は重要か



5. 魅力ある子育て支援とは

「子育て支援」とはどのようなことだと思うか、イメージすることなどを自由に記述してもらったところ、大きく①「親子で楽しめる場」 ②「悩みを軽くできる場」 ③「親子の交流の場」の3点に分類することができました。次に、どのような子育て支援に魅力を感じ、参加したいと思うかを自由に記述してもらったところ、①「親子でいろいろな遊びを豊富に体験できる」 ②「楽しそうなもの」 ③「保育士や栄養士などがある」の3点に多く意見が寄せられていました。また、子育てに関することでのどのような情報を得たいか質問したところ、①「子どもの食事について」 ②「子どもの発達・病気について」 ③「叱り方・しつけについて」 ④「遊び方について」 ⑤「病院・保育園・幼稚園などについて」の5点に分類されました。

子育て支援を実施する際、参加者の求めている場づくりと、ほしいと思っている情報を提供していくという姿勢は忘れてはならない要素であり、参加者の求めていることを探ることも大切であると感じます。そして、これらを盛り込んで計画・実践していくことが魅力ある子育て支援の場の提供であり、参加者がぜひ参加したいと思える子育て支援の場であると感じます。

6. 保育者養成校で実施している子育て支援事業

桜花学園大学・名古屋短期大学「保育子育て研究所」で行っている子育て支援事業「子育て交流会」への利用頻度は、月に1～2回利用している人が38名、毎週が16名の順に多く、また、「子育て交流会」の魅力を自由記述であげてもらったところ、主に ①「学生さんが一緒に遊んでくれる」 ②「保育者、大学の先生がいて、ピアノを弾いたりおもちゃを作ったり絵本を読んだりしてくれるので、子どもも毎回楽しみにしている」 ③「子育てアドバイスがきける」の3点に集約されていました。これらの点は、保育者養成校で行われている子育て支援事業の特色といえるのではないのでしょうか。

今回の調査から「子育て交流会」への参加者の子育て支援に対する意識と親のニーズが明らかにされました。アンケート結果からは、地域における子育て支援事業の実態も垣間見ることもできました。今日では、市町村やNPOなどが主体となって全国各地でさまざまな子育て支援の取り組みがされており、今や、親がどこへ行くかを選べる時代になってきているといっても過言ではありません。子どもが1歳を迎える

前に子育て支援の場へ出かけて行く親子が多くいます。参加者は、子育て支援事業の場が、①「心地よい場であるか」 ②「プログラムの内容はどうか」 ③「保育者や栄養士などの専門家がいるか」の3点を基準にしていることが明らかになりました。これからは、今までの実践を整理し、再点検をおこない、積極的に改善していくことが求められています。

また、本学の子育て支援に参加する中で、保育者養成校で行われている子育て支援事業の特色でもある ①保育者を目指す学生が参加している ②子育て・保育に関する多分野の専門家がいるという点に、参加者は大きな魅力を感じていました。来年度は、付属幼稚園とも連携をとりながら幼稚園で実施する子育て支援にも取り組んでいく予定でいます。今後も、保育者養成校としての特色のいかし方を検討し、地域に根ざした魅力ある「子育て交流会」を実践していきたいと考えています。

おわりに

今年度は、保育所保育指針、幼稚園教育要領の改訂案が出され、大きな論議をよんでいます。そのなかで、特に、社会状況の変化による家庭や地域の教育力が低下し、年々、子育ての不安や悩みを抱えた保護者が増加していることが指摘され、子どもの保育とともに、その保護者に対する子育て支援を保育所、幼稚園が担い、地域の子育て支援のセンターとしての役割を果たすことが明示されました。

保育者を養成する大学として、キャンパス内で実施しているこの「子育て交流会」は、学生が乳幼児と保護者にじかに触れ合いながら子育て支援のあり方を学ぶ貴重な体験の場になっています。来年度は、新設された校舎(7号館)に長年の念願だった「プレイルーム」が設置され、5月にオープンします。キャンパス内で遊ぶ親子の姿に触れることは、保育科、保育学部の学生だけでなく、他学科の学生にとっても将来の母親像を学ぶよい機会になります。より多くの学生が参加できる体制を工夫し、さらに、大学の教員の専門性をいかした活動を「子育て交流会」のなかに取り入れ、付属幼稚園との連携をはかりながら、地域の子育て支援センターとして、また開かれた大学としての役割を果たしていきたいと思っています。

また、今年度は、地域の「子育て支援ボランティアのつどい」をこのキャンパス内で開催することができました。これからも、こうした連携を積み重ね、お互いに学び高めあいながら、より良い子育て支援のあり方を追求していきたいと願っています。

2007年度 子育て交流会・赤ちゃん交流会・開放日の経過・参加人数・内容

- ※ 5月15日（火） 第1回 子育て交流会 天気：晴れ
 子ども 45名 大人 44名 学生 8名（専攻科）
 大きな紙芝居「みんなでぼん」、パネルシアター「ふしぎなポケット」
- 5月22日（火） 5月 子育て支援室開放日 天気：晴れ
 子ども 33名 大人 33名
 自由遊び
- ※ 5月23日（水） 第2回 子育て交流会 天気：晴れ
 子ども 35名 大人 31名 学生 19名（1年宍戸ゼミ）
 手遊び「目の窓あけろ」、パネルシアター「カレーライス」
 ペープサート「ちちんぷいぷい」 (宍戸)
- ※ 6月 5日（火） 第1回 赤ちゃん交流会 天気：曇り
 こども 33名 大人 33名 学生 4名（専攻科）
 赤ちゃんとお母さんのふれあい遊び (上村)
- 6月12日（火） 6月-1 子育て支援室開放日 天気：晴れ
 子ども 21名 大人 21名
 自由遊び
- ※ 6月13日（水） 第3回 子育て交流会 天気：晴れ
 子ども 33名 大人 30名
 手遊び「あたま、かた、ひざ ぼん」
 作って遊ぼう「びよんびよんがえる」 (水谷)
- ※ 6月19日（火） 第4回 子育て交流会 天気：曇り (幼稚園見学会)
 子ども 66名 大人 64名
 うちわを作ろう！（貼ったり描いたり）
 読み聞かせ「だんまりこおろぎ」 (清)
- ※ 6月26日（火） 6月-2 子育て支援室開放日 天気：曇り
 子ども 30名 大人 27名
 自由遊び

-
- ※ 6月27日（水） 第5回 子育て交流会 天気：晴れ
 子ども 33名 大人 32名 学生 18名
 手遊び「目のまどあけろ」「ころころたまご」
 ペープサート「けんちゃんの歯みがき」「ノンタンの鉄棒」 (宍戸)
- ※ 7月 3日（火） 第2回 赤ちゃん交流会 天気：雨
 子ども 23名 大人 22名 学生 11名（専攻科4名、ゼミ7名）
 わらべうた「ささにたんざく」「でぶだりほうだり…」
 布を使ってあかちゃんと遊ぶ
 手遊び「トウキョウトニホンバシ」 (上村)
- 7月10日（火） 7月-1 子育て支援室開放日 天気：雨
 子ども 15名 大人 14名
 自由遊び
- ※ 7月11日（水） 第6回 子育て交流会 天気：雨
 子ども 16名 大人 16名
 手遊び「あたま、かた、ひざぼん」
 作って遊ぼう「新聞紙を使って、てっぼうをつくろう」 (水谷)
- 7月17日（火） 第7回 子育て交流会（幼稚園ホール） 天気：曇り
 子ども 32名 大人 31名
 水遊び、シャボン玉
 読み聞かせ「だんまりこおろぎ」 (清)
- ※ 9月 4日（火） 第3回 赤ちゃん交流会 天気：晴れ
 子ども 26名 大人 25名
 わらべうた「おつきさまえらいの」、「おねんじゅしゅもくれ」
 （紙風船を使って）お手玉をばーん (上村)
- 9月11日（火） 9月-1 子育て支援室開放日 天気：雨
 子ども 19名 大人 18名
 自由遊び
 読み聞かせ「おおきなおきなおいも」 (水谷)
- ※ 9月12日（水） 第8回 子育て交流会 天気：晴れ
 子ども 34名 大人 32名
 作って遊ぼう「おおきなかお」（レジ袋と新聞紙を使って） (水谷)
- ※ 9月 18日（火） 第9回 子育て交流会（幼稚園ホール） 天気：晴れ
 子ども 55名 大人 49名
 楽器を使って親子で自己紹介、わらべうた (清)
-

- 9月25日（火） 9月-2 子育て支援室開放日 天気：晴れ
子ども 18名 大人 17名
自由遊び
- ※ 9月26日（水） 第10回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 29名 大人 27名 学生 6名（浅野ゼミ3年）
手遊び「目のまどあけろ」
本の紹介「脳内汚染」（岡田 尊著）
読み聞かせ「いないいないばあ」「はじめてのおつかい」 （宍戸）
おもちゃの話 （浅野先生）
- ※ 10月 2日（火） 第11回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 26名 大人 24名 学生 6名（田端ゼミ3年）
うたって手遊び「どんぐりころころ」
読み聞かせ「どんぐり どんぐり」
作って遊ぼう「ころんころん」（折り紙ドミノ） （水谷）
- 10月 9日（火） 10月-1 子育て支援室開放日 天気：雨後曇り
子ども 7名 大人 7名 学生 7名
手遊び「とんとんとんとんひげじいさん」
ふれあい遊び「おうまはバカパカ」
紙芝居「おくちをあーん」
布遊び「おおかせ」 （田中ゼミ学生）
- ※ 10月10日（水） 第12回 子育て交流会 天気：曇り
子ども 29名 大人 27名
ふれあい遊び「うまはとしとし」「おすわりやす」「ぞうきん」
紙芝居「よいしょよいしょ」
手遊び「まつぼっくり」 （清）
- ※ 10月16日（火） 第13回 子育て交流会（幼稚園ホール） 天気：晴れ
子ども 36名 大人 34名 学生 10名
手遊び「はじまるよ」
紙芝居「ママといっしょ」
ふれあい遊び「いっぽんばし こちょこちょ」「はち ぶーん」
「ちびっこマンたいそう」「エビカニクス」 （専攻科学生）
うた「ぞうさん」「どんぐりころころ」「いぬのおまわりさん」
「ドレミの歌」「しあわせなら手をたたこう」 （高須）
- 10月 23日（火） 10月-2 子育て支援室開放日 天気：晴れ
子ども 23名 大人 22名
紙芝居「もういいかい」 （水谷）

- ※ 2月 5日 (火) 第7回 赤ちゃん交流会 天気：曇り
子ども 19名 大人 18名
わらべうた「おにさのるすにまめいってがらがら」
「だるまさん」「おつむてんてん」 (上村)
- 2月12日 (火) 2月-2 子育て支援室開放日 天気：雨
子ども 12名 大人 12名
自由遊び
- ※ 2月13日 (水) 第22回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 28名 大人 27名
作って遊ぼう「くるくるまいてコマをつくろう！」 (水谷)
- ※ 2月19日 (火) 第23回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 25名 大人 24名
絵本読み聞かせ「おおきなかぶ」(組み合わせパズルを使って) (宍戸)
- 2月26日 (火) 2月-2 子育て支援室開放日 天気：雨
子ども 23名 大人 22名
手遊び「あたま・かた・ひざボン」「キャベツの中から」
絵本「りんごが食べたいねずみくん」 (水谷)
- ※ 2月27日 (水) 第24回 子育て交流会 (幼稚園ホール) 天気：晴れ
子ども 52名 大人 48名
おおきくなったね会
写真入れをつくろう！ (宍戸・清)

Ⅲ

保育実践報告

楽しい表現活動が育てる2歳児クラスの仲間関係

名古屋・のぎく保育園 島田真由美・川元麻由美

1. はじめに

2006年度 2歳児うさぎ組

20名(男15名 女5名)正規職員2名+8Hパート1名1

ひよこ組(0,1歳児クラス)とあひる組(1歳児クラス)からそれぞれ進級してきたうさぎ組。にんじんグループとびーまんグループとお部屋は2つに分かれるけれど、だからこそ、全員で一緒にの体験とそれを通した友だちとのつながりを大事にしてきました。

2. うまく関わりあえない子どもたち

4月の頃、ひよこ組(0,1歳児クラス)から進級した子とあひる組(1歳児クラス)から進級した子は、どんな子なのかお互いのことがまだよくわからず、お互いに気にはなるけれど、ひよこ組から進級した子はひよこ組の子と、あひる組から進級した子はあひる組の子と遊んでいることがほとんどでした。そして、お互いが近づくと、“自分の遊んでいるおもちゃを持っていかれるのではないか”と不安になり、ドーンと押してしまったり、“その子のそばにあるおもちゃをかしてほしいけど、ドキドキ…”として、かして一と言えず固まったり、泣けてしまったり、無理やり持って行ってしまったり…という姿がよく見られました。

3. みんな大好き! クッキングから製作へ

うまく関わりあえない子どもたちの姿を見て、ますます“一緒にみんなで楽しいね”の経験をするによって、月齢の高い子たちは一緒にのつもりを共有できたり、“一緒にこの子とやったねという経験から仲間意識や安心感が芽生えていき、不安の壁が薄くなっていった”“友だち関係が密になったり、広がっていったらな”と思い、楽しい制作・あそび・クッキングなど、みんなで楽しむことを大切にして取り組んでいきました。

●4/11 ポップコーンクッキング●

うさぎぐみに進級したお祝いの意味もこめてうさぎぐみ全員での見てるだけクッキング第1弾として取り組みました。今回は見てるだけなので、変化もあって楽しいポップコーンを選びました。ひとつひとつ、「まずはこの油を入れます！透明でトロトロだね～」と調味料や食材の様子をみんなで見たり、「油を入れたらとうもろこしの種をいれまーす！」と調理の過程をおさえながら調理していきました。ポップコーンのボンボンとはじける音に耳をダンボにしたり、ポップコーンのいいにおいをクンクンかいだり、目と耳と鼻と…五感をフルに使って感じました。フタを開けると豆がポップコーンに変身していたのでみんなびっくり仰天。「あ！ポップコーンだ！」「ポップコーンになった！」とみな口々に言い、大はしゃぎでした。そして、あっという間にみんなのお腹の中に入っていました。その後もしばらく漂うポップコーンのいい香りに「今日ポップコーン作ったよね」とクッキングの様子を何度も振り返りました。ボンボン音がするワクワク感や蓋を取ったときの驚きをみんなで共有できた大成功の取り組みとなりました。

●4/13 ポップコーンタンポ製作●

クッキングでの楽しい経験を違ったかたちで楽しめるといいなと思い製作でポップコーンの再現あそび



「ポップコーン」

をしました。大きなホットプレートが描かれた色画用紙にフィルムケースタンポでポップコーンを再現。スポンジはお花のような形にカッティングしてポップコーンのような形にしてみました。黄色の豆がポップコーンに変化したというところが印象的だったと思うので、ホットプレートの上には黄色の豆も描きました。黄色の小さな豆のところに「ボンボン」と言い

ながらはじけるようにタンボし、豆をポップコーンに変身させたり、ホットプレートからポップコーンがとびだしてきたことを覚えていて「とんできてびっくりしたよね」とおはなししながらタンポ。中には、たくさんポップコーンができたことを表現したくて、塗りたくって表現している子もいました。とらちゃんは丁寧に豆の上にタンボし、豆の上すべてにタンボし終わると「もうなくなった」とタンポはおしまい。

そして、できあがったポップコーンに「あっちいよ、フウ～フウ～」と息を吹きかけ、バクリと食べるマネっこをして楽しんでいました。つもりになってポップコーンをたくさん食べた後は「おとうちゃん、おかあちゃんにも食べてもらおう～！」の子どもたちでした。

去年やおとしのうさぎぐみの実践から、共通体験を通じて子ども同士がつながっていくということを学んでいたの、早い時期からみんなに共通体験をさせてあげたいと思い、4月のクラス替え直後に実施し

ました。クッキングだけでなく、それにまつわる製作をすることで、より、子どもたちの印象に残るような取り組みになったかと思います。また、クッキングのすぐ後に製作をしたので子どもたちの記憶に新しく、月齢の低い子もイメージしやすかったようです。まだ進級したばかりで不安定なうさぎぐみでも文句なしにみんなが楽しめました。しかし、まだ友だちと一緒に楽しんだというよりは、自分の楽しかった場に〇〇君もいたなという感じのみんなでした。

この頃のとらちゃん(2歳5ヶ月)は、特に不安が強く、自己領域もいっぱい、ひよこ組から進級してきた子が自分に近づいただけで押したり、叫んだり、かみついたりがよくありました。そんな友だちと関わるのがうまくできないとらちゃんもクッキング&製作ならば、友だちとのトラブルもなく楽しめ、絶対に友だちと一緒に楽しいと感ずることができると4月、5月のクッキングと製作(一覧表参照)で保育者も手ごたえを感じました。

4. ほんとはつながりたいとらちゃん

とらちゃんは、プールではひとりあそび、もしくは対保育士との関わりが主で、友だちがあそんでいる様子を遠巻きに見ていました。そんな姿を見て、本当は友だちとも関わりたいんだということが見てとれます。友だちとあそびたいのに友だちとうまく関われない為に友だちから敬遠されてしまう、そんな悪循環をストップさせたいと思い、あそびの中で「とらちゃんの自己領域を徹底的に守る」とことと、守るだけでなく「保育士を媒介として友だちにつなげる」とことを大事に働きかけてきました。その甲斐あってか、保育士が間に入ると、少しずつ自分の気持ちを口で言えるようになってきました。この調子で、もっと友だちと関わって欲しいと思い、とらちゃんの好きな美術活動で“みんなで一緒にあそんで楽しかった!”と思えるような製作を試みようと思いました。

●8/8、10、22 はじき絵●

大布あそびで海だ! 海だ! ざぶ…ん! と体をいっぱい動かしてから、保育士が「みんなも海をつくっちゃ



はじき絵

おうか?」と大きな画用紙を見せると、みんな、「やる〜!」と、びよんびよんジャンプして大喜びしていました。絵の具はちょっと水を多めに入れてといたものを使用しました。ひとりずつ絵の具トレイとタンポを配り、いざ、色塗りです。タンポはフィルムタンポを使用しました。絵の具をタンポにたっぷりと含ませて「ざぶーん、ざ

ぶーん」と塗り広げていくと、白のクレパスで描いた魚たちが浮き出てきたので子どもたちはとっても驚いたようです。「あっ！魚がおったあ！」「ここにもおったよ！」と保育士に教えてくれる子どもたち、「もっともっとぶーんって海作ったらおさかなさん出てきてくれるかな？」という保育士の声かけに、より一層はりきります。とらちゃんもタンポを両手に持って画用紙が破れるくらいにたくさん絵の具を塗りました。友だち同士で「ここにもおるかなあ？」「いたね～!!」と会話しながら一緒に絵の具を塗る姿も見られました。魚を画用紙の隅々までかきこんでいたこともあって、画用紙がほとんど真っ青になるまで絵の具を塗り、大きな海が出来上がりました。

今回は隠れた魚を友だちと一緒に発見するというワクワク感も手伝って、以前はあまり見られなかった友だち同士の関わりが増え、会話も弾んだように思います。また、グループでひとつのおきな紙こ向かって製作したこともよかった点のひとつです。一緒に紙に向かうことで、友だちと一緒に作ったという実感が増したと思うのです。本当はもっともっと大きな紙で全員で取り組んでもいいかなと思ったのですが、自己領域やこだわりが強い時期なので、大きな紙1枚に3人くらいの広いスペースを用意しました。さらに、「もっともっと」の発達要求も見通しておかわりの紙も用意しておいたことで子どもたちも思う存分にあそぶことができました。

5. ごっこあそびが楽しくなってきたら

10月頃になると、子どもたちだけで数人で同じイメージで遊びはじめる姿や、こちらがわかりやすいグッズや環境設定をすると、みんなで同じイメージで楽しく遊べる姿がよく見られるようになってきました。そんな中、“みんなで同じ経験をしたことをいろんな楽しみ方でみんなで楽しめたらもっとおもしろいし楽しいのにな”“そしたら、子どもたちにいろんな楽しみ方を伝えられるし、楽しい経験から友だちともさらに楽しい関係・刺激的な関係・安心できる関係などを、築いたり発見できたりできるのにな”と思い、遠足などの行事をきっかけにしながら色々取り組みできました。

●11/10 やきいも大会●

はじめて自分たちも、幼児さんたちと一緒にいきおいよく燃えている火に向かっておいもを投げるという参加の仕方をするうさぎぐみ。みんな「今日はやきいも大会なんだよー」「おいもを焼くんだよね!」とはりきっていました。園庭で自分たちがおいもを焼く番になると、勢いよく燃えている火を目の前にして、少し緊張気味でしたが、順番に「エーイ!」と投げられました。「火、すごかったね」「(僕たち)すごかったでしょー」「頑張ったでしょー」と誇らしげ。子どもたちにとって、それぞれの自信につながる会へととなりました。そして、いもが焼き上がり、運ばれてくると、あつあつのおいもを見たり触ったりして、「あつついねー」「できただねー」ゆげがおいもから出ているのを見て「けむりでとる!まだもえとるんじゃない?」と子どもたち同士で話しながら「おかわりちょうだい!」と言ってたくさん食べました。

●11/13 いもづくり(ドボン染め→実・皮)製作●

みんなやきいも大会のことや、いもの実と皮の色を思い出しながら、保育士が折った和紙を絵の具の中にドボンとつけて染める製作をしました。和紙の白いところがどこにもなくなるように丁寧に自分たちでチェックして染める姿や、手につくのが苦手だったり、こだわりで少しだけ染める姿もありました。特に、白い和紙に絵の具が吸い込まれていく様子は、とても不思議だったようでみんな息をのんでやっていました。保育士が自分や友だちが染めた和紙を広げると、「きれいだねー」と言いながら見とれておりました。とらちゃんは、とってもはりきっていて自分の和紙が染まっていくのを見ては「おーっ!」と嬉しそうに歓声をあげたり、一緒にとりで染めているしゅんくん「しゅんくんのも染まってきてるねー。おもしろいねー」と嬉しそうに話しかけたりと、表情いっぱい“楽しいね”“おもしろいね”を友だちと共感しあって楽しんでいました。

●11/15 いもづくり(立体化)製作●

以前作ったドボン染め黄色い和紙を丸めて、それから皮の部分である紫色の和紙で包み、立体的なおいもを作りました。紫の皮をめくると、黄色い実が出てくるのがおもしろくて、みんなそーとめくっては中身が見えると「うふふふっ」と笑っていました。保育士が「あちちちー」と演じて食べようすると、「まだ焼けてないからたべれないよー」と月齢の大きい子どもたちからの指摘。

保:「じゃあ、今度焼いて食べようか〜」

子:「うん」

となりました。とらちゃんは、友だちのつくったのを見てそれぞれに声をかけて

とら:「ゆみちゃんもながーいおいもなんだね。とらちゃんのもながいでしょー」

ゆみ:「ほんとだねー」

とら:「ひなくんのはまん丸のおいもだね」

ひなた:「うん」

と嬉しそうに交流して、楽しい雰囲気の中でつながっておしゃべりしていました。

●11/17 焼き芋大会ごっこ●

自分たちで作ったおいもを、やきいも大会の時みたいにアルミホイルでクルクルッとまいて、本物さながらに前日拾ってきた葉っぱのお山に投げ入れました。子どもたちはつもりになって「あついで近づいたらあぶないよー」「しまちゃん、気をつけてー!!」とおいもを見守るのでした。そして、焼けたおいもをパクリ。ちゃーんと皮をむいて食べました。

毎年、うさぎ組ではやきいも大会の再現あそびをするのですが、去年の2歳児クラスでは、やきいもの皮をむいて食べる姿があり、その時中身が新聞紙で子どものイメージが「しんぶんじゃん!」と途絶えることがあったという話をきいて、おいもを立体で再現することに加え、皮だけでなく中身も黄色で作ることにこだわりました。そうすることによってよりリアルになり、みんながイメージしやすいものになったかなと思いました。

6. まとめ

4月の時は、ひよこ組から進級した子はひよこ組の子と、あひる組から進級した子はあひる組の子とで遊んでいることがほとんどでしたが、みんなで一緒に楽しい経験をしていく中で、子どもたちをその楽しかった経験が結びつけていき、その子その子のおもしろさを知ったり、みんなが自分のことをわかってくれる安心感が沸いていったりと、楽しいあそびを通して友だちとのつながりも広がっていったと感じました。不安が強く、自己領域もいっぱいなとらちゃんでしたが、お口で言わないと友だちはとらちゃんのことをわかってくれないということが経験を通して少しずつわかってきたようです。

他の子どもたちも、待っていればちゃんと替わってもらえる、かしてもらえるという経験から、順番を待つこともぶつかり合うことなくできるようになってきました。今、低月齢の子たちの自己領域が強くなってきて、「ダメー」「全部がいいー」という低月齢同士のぶつかり合いが出てきましたが、高月齢の子たちは逆に待ちかたや上手にかしてもらおう方法を身につけてきて、低月齢の子とぶつかり合うことはほとんどみられなくなりました。きっと、とらちゃんにとっても、クラスみんなにとっても、安心できる、楽しいうさぎぐみ・友だち・保育士になったのかなと思いました。

また、“美術”は、粘土や感触遊びなど楽しい遊びから発展して楽しむ美術、遠足でお弁当を食べた、焼きいも大会で焼きいもを焼いたなどの体験をとおして楽しむ美術、絵本などをとおしてイメージで楽しむ美術など、いろんな楽しみ方があると思いました。そして、美術からごっこ遊びにもつながったり、ごっこ遊びを美術というあそびの視点からさらに違った風楽しんだり、子どもたちのあそびを膨らまし、刺激するものだと思います。できた作品を部屋に飾っておくことで、その作品を見ては「〇〇したね～」と友だち同士や保育士と振り返って、楽しかったこと・嬉しい気持ちを話してまた共感したり、子ども同士のあそびにつながっていったりと、ずっと作品は残るもの・目で見えるものだから何度でもあの頃の思い出に戻れて、つながれるというとてもすてきなものだと思います。美術だけではないですが、ねらいをどのように持つかで、いろんな風に子どもたちに働きかけられるのだと感じました。また、認識面などの差があるため、どの子にもわかるようなわかりやすい環境設定・導入の仕方・流れが大切だなと実感しました。これからも、美術をはじめ、“楽しいこと”“あそび”を大切に保育していきたいと思います。

2006年度 主な取り組み

4月…… 4/11 ポップコーン(クッキング)→ 4/13 ポップコーンづくり(タンポ)

4/25 こいのぼりづくり(スタンプ)

5月…… 5/19 サラダづくり(クッキング)ー

5/25、26 サラダづくり(シールはり・色画用紙やぶり・のりづけ)

ごっこあそびもしたよ

6月…… 6/12、13 でんでん虫づくり(粘土スタンプ)

6/14、16 あじさいづくり(お花紙やぶり・のりづけ)

7月……7/3、4 天の川づくり(綿棒タンポ)

8月……プール

*魚つりあそびもしたよ

8/3 色水あそび

8/8、10、22 はじき絵

9月……9/5 感触遊び(片くり粉)

10月……えんそくごっこ(前・後)

10/19 えんそく

10/20、24 お弁当づくり(のりづけ)

11月……11/10 やきいも大会

11/前、後 折り紙

11/13、14 いもづくり(染物→実・皮)

11/15 いもづくり(立体化)

11/16 葉っぱひろい

11/17 やきいも大会ごっこ

11/22 お買い物お好み焼き

(クッキング)*お好み焼きごっこ(お手玉で見立てごっこあそび)

12月……12/8 巨体ツリーづくり(もみの木・クレヨン・タンポ)

12/18 かざりつけ(マカロニ・ボンボンつけ)

12/19、21 ツリーづくり(ひもとおし)

12/22 クリスマス会

1月……1/16 うどんづくり

1/15、18 おもちづくり&おもち焼きごっこ(小麦粉粘土)

1/22 たこづくり(シールはり)&たこあげ

1/29 きなこ団子づくり

1/30 鬼のお面づくり

2月……2/3 節分

2/26 ひなまつり製作

3月……3/2 ひなまつり

3/15 えんそく

3/19 お弁当づくり(折り紙)・立体

3/22 お買い物焼きそば(クッキング)

「できる自分」に気付くには ― A男の姿を追って―

武豊町立 中山保育園 河野 彩

はじめに

私は他園から転勤し、2度目の年長組を持たせていただきました。そして「だってほくできないもん」が口癖のA男に出会いました。

部屋から出て行く、みんなと行動しない、一人で居ることが多い、といった姿が見られました。一見、“自分勝手”と見える行動ですが、私はA男が寂しがっているように見えました。自分に自信が持てていないようで、製作・あそびなどの活動に対し、“自分にはできない”と決め付けてしまいます。そして、周りの子どもたちは、「Aくんだからできなくて当たり前」とレッテルを貼っています。A男にとって、居心地の良い環境ではありませんでした。

今のA男の姿があるのは、認めたり受け止めたりしてくれる友だち関係が出来ていないことも原因のひとつでは、と感じました。先日、神田英雄先生の研修で「自信とは、周りから口先だけで誉められて身に付くものではなく、事実と照らし合わせた上で、“できる自分”を感じることで身に付くもの」ということを学びました。

その言葉をヒントとし、A男の「だってほくできないもん」の悲しい口癖を「ほくもできる!」という明るい言葉に変えていきたいと思いました。また、周りの子のA男に対する見方を変え、心地良い環境の中で友だちを応援し、互いに認め合えるクラスにしたいと思いました。

A男の好きなもの

A男と仲良くなりたいと思い、「好きなものは何?」と尋ねました。すると、小さな声でしたが「ポケモン」と教えてくれました。そこで、ポケモンのキャラクターであるピカチュウのパズルを作りました。“難しくできない”と投げ出さぬよう、ピースを少な目にし、“これなら出来そう”と安心できるようにしました。

パズルを布で隠し、「Aくんに良いもの持ってきてちやつた〜!」と声をかけると、「なに?」と関心を持ってくれました。「見たい?」「どうしようかな〜」ともったいぶってみせると「見たい!」「見せて!」と次第に表情が明るくなってきました。気がつくと周りの子も注目していました。「じゃーん!」と見せると「ピカチュウだ!」と喜び、早速遊び始めました。「ほくも入れて!」と他の子も参加してくれ、A男は友だちと一緒に遊んでいました。

A男は人に対して、心を閉ざしているのでは…と心配していましたが、何かきっかけがあれば友だちと遊べるんだな、と安心しました。

握りばしを直そう

A男を見ていて気付いたことがありました。ただ一人、握りばしで食事をしていることです。周りの子の目は気にならないのかな、焦らないのかな、と思い、「こうやって(手を添えて持ち方を知らせる)持って食べて

みようか」と声をかけると、「だってできないもん」と言いました。 そんな様子を見ていた子たちは「せんせい、Aくんはできないんだよ」「年中の時もできなかったもん」と教えてくれます。「大丈夫、先生もできなかったもん、Aくんやってみよう!」と手を添えようとする、「んー!(いやだよ!)」と嫌がりました。「ほらね、できないでしょ」と周りの子たちから言われてしまいました。

保育士の思いばかりが強く、肝心のA男の気持ちが箸に向いていません。このまま無理矢理続けては、食べることも嫌になってしまうのではと思いました。

しかし、握りばしが直れば「できた!」という成功体験と、周りの子からの「すごい!」という言葉聞くことができ、A男に自信が付いていくかもしれない、という期待もありました。私より、以前からA男のことを知っている子どもたちですから、きっと驚くと思いました。

そこで、楽しみながら箸の持ち方が身に付くようにと、おもちゃを作りました。ペットボトルを半分に切って、A男がよく触っていた“かえる”をキャラクターにし、かえるにスポンジのごはんを食べさせるというあそびです。つかみやすいように、スポンジを用意したり、正しい持ち方を描いた絵を貼ったりしました。

子どもの目の届くところに置いておくと、おもちゃに気付き、遊び始めました。しばらくするとA男が登園しました。「おはよう!また良いもの作ってきたのよ」「Aくんもやってみてほしいな」と声をかけました。すると、驚いたことにとてもスムーズに箸をつかっているのです。私とその様子を見ていた子どもたちは、目を丸くしてしまいました。

「Aくんできるの?!」と思わず聞くと「だって家で練習してるもん」と言い、さらに驚きました。では、どうして握りばしのまま食事をするのだろう、と疑問が浮かびました。

A男の思い、母親の思い

周りから「Aくんはできない」と決められてきたことで、“ほくはできないんだ”と感ずるようになってしまったのでは、と思いました。そして、このような姿を母親に知ってもらい、家庭との連携を取りたいと考えました。

母親は、握りばしであるA男について「もっと早く教えてあげれば良かったなって思ってた。」と話してくれました。また、「初めての子で、自分のそばに居させすぎたし、心配で、なんでも“だめ”って言いすぎちゃつて。Aの世界を狭くしていたのは自分って気付いたんです。」とも話してくれました。

母親の深い愛情とA男に“やってみたい”という気持ちが生まれても、“だめ”と言われてきたことで意欲が失われてきたという背景を知ることができました。

母親と「今年の目標は箸」と決め、一緒に応援していこうと決めました。家庭でも、トレーニング箸や割り箸を使って練習していくとのことです。あとは、A男の気持ち次第となりました。

握りばしがなおった!

「今日は10日だから10回がんばろう!」と少しずつ、握りばしでない持ち方で食事を重ねてきました。そんなA男と保育士の様子を見て、周りの子も「がんばれ!」と応援してくれるようになっていきます。「もう、直ってるんじゃないかな」と思う程スムーズです。

そんなある日、母親が「先生!Aくん、何も言っていないのに、ちゃんと箸を持って全部ラーメン食べました!」

と嬉しそうに教えてくれました。「すごい!目標達成できそうですね!」と一緒に喜びました。

しかし、給食になると「もう、22回食べたよ」といってやめてしまいます。「本当は直ってるのでは…」と思い、「え?ごめんね、見てなかったの、もう一度食べてみて」と言ってみました。「えー!もうちゃんと見てよ!」と言いながらもまた食べ始めました。しばらくして「食べたよ!」というA男に対し、また「ごめんね、目が痛くなっちゃつて、もう一度食べて」と言うと、周りの子が「本当に食べとった!」「おれ、見とった!」「せんせい、ちゃんと見とかんと!」と怒り出しました。

「ごめんね」と謝り、そんなやりとりを続けていると「あ、全部食べちゃった」とA男が言いました。「Aくんすごい!」「やったじゃん!」「Aくんに拍手〜!」と、歓声が起こりました。私もうれしくなり、思わずA男を抱きしめた後、自分のことのように喜んでくれた子どもたちを抱きしめました。A男にとっても子どもたちにとってもう楽しい日になりました。

とびばこに挑戦しよう!

握りばしが直り、友だちからも「すごい!」と言われたA男は、表情が明るくなりました。そして、A男の周りには友だちが集まるようになりました。クラスの雰囲気もいい、互いに応援できるようになってきた、そんな子どもたちに“とびばこ”の体育課題を選びました。選んだ理由は、実戸洋子先生の『5歳 知りたい意欲を育ちのバネに』(労働旬報社)という本で“できる”“できない”が目で見てもはっきりとわかり、その分努力して“できる”ようになる状態をしっかりとつかむことができ、それが励みになり自信につながる」という実践を知り、A男だけでなくこのクラスの子どもたちにも必要であり、乗り越えられると思ったからです。周りの目を気にするようになってきた子どもたちにとって、“とびばこ”はみんなが同じスタートラインであり、「みんなもできない」「失敗しても大丈夫」という安心感がもてました。

『どろぼうがっこう』の絵本を読んだ後、“どろぼう修行”として取り組んでいきました。初めは1段にすると「低すぎ〜」と言いながら安心したようで、楽しくできました。

A男は、そんな様子を楽しそうに見ながらも、挑戦できずにいました。「Aくん、ドキドキする?」と尋ねると、うなづきました。「Aくん、大丈夫だよ!」と声をかけると「がんばれ!」と子どもたちも応援してくれています。しばらくして、A男は動き出しました。とびばこに近づき高さを確認すると、安心したのか挑戦しました。すると、成功!友だちからの「Aくんすごい!」の言葉に、「すごいってほくのこと?」と保育士に尋ねました。「そうだよ!」と答えると「えー!」と喜びました。それからというもの、とびばこへの挑戦は続き、生活発表会で5段を跳んで見せてくれました。

終りに

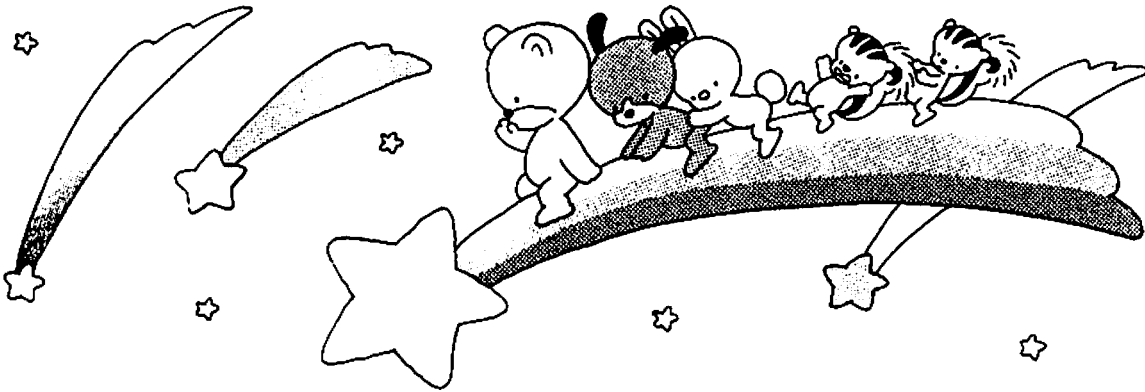
「できないもん」が口癖だったA男でしたが、握りばしが直ったことがきっかけとなり、製作・あそびに対し「できない」と言わなくなりました。そして、“できる自分”に気付いたA男はいきいきとしています。

そして、それに気付いたのはA男だけではなく、クラスの子どもたちでもありました。身体も心も大きくなった子どもたちは、卒園式の時に、こんな言葉を残しました。

〔みんなで特技を披露した発表会〕

「ドキドキしたけどみんなを見て勇気が出ました。」

「友だちってすごいなって気づけたよ。」



資 料

2007年度 事業報告

1 子育て交流会

今年度も本学教員、ボランティアのみなさんの協力で子育て交流会を実施しました。詳細は、本号の「保育者養成校における子育て支援」をごらんください。2008年度からは新設の7号館プレイルームに場所を移して実施する予定です。

2 高校生のための保育学入門講座

保育学入門講座は、参加人数の減少などを理由に本年度限りで終了することとなりました。

以下は、本年度の参加者へのアンケート結果です。

参加人数

	人数
第1回	6
第2回	25
第3回	8
第4回	31
第5回	9

学年(人数(%))

高1	高2	高3	中学生	その他
0	6(7.9)	62(81.6)	0	8(10.5)

性別(人数(%))

女	男
74(97.4)	2(2.6)

この講座を知ったのは？(人数(%))

高校でチラシを見て	29(38.2)
高校で先生にすすめられて	27(35.5)
大学のHPを見て	11(14.5)
大学展や進路相談会で知った	3(3.9)
友だちに誘われて	4(5.3)
その他	14(18.4)

講座内容に満足しましたか？(人数(%))

たいへん満足した	64(84.2)
満足した	11(14.5)
どちらともいえない	1(1.3)
不満である	
たいへん不満である	

講座の内容は理解しやすかったですか？(人数(%))

たいへんわかりやすかった	67(88.2)
わかりやすかった	9(11.8)
どちらともいえない	
難しかった	
たいへん難しかった	

この講座でとりあげたテーマに興味はもてましたか？(人数(%))

たいへん興味が出てきた	64(84.3)
少し興味が出てきた	12(15.8)
どちらともいえない	
あまり興味を持てなかった	
ほとんど興味を持てなかった	

この時期は参加しやすいか？(人数(%))

参加しやすい	70(92.1)
参加しにくい	2(2.6)

3 第4回 夏季セミナー

本年度も夏季セミナーを実施しました。

(1) 参加者

当日参加者数（受付で把握できた数） 175名 （名短146名 桜花31名）

(2) アンケート回答結果 アンケート回答者 99名

卒業年次

卒業年次	2007年	2006年	2004年～
人数	76	15	4

卒業学校

卒業校	名短	桜花	その他
人数	73	23	1

勤務先

勤務先	公立保育園	私立保育園	公立幼稚園	私立幼稚園	その他
人数	56	23	5	7	7

木村講義（人数）

たいへんよかった	よかった	どちらともいえない	よくなかった	まったくよくなかった
23	32	11	0	0

小嶋講義（人数）

たいへんよかった	よかった	どちらともいえない	よくなかった	まったくよくなかった
22	8	0	0	0

参加した分科会（人数）

0・1歳	2歳	3歳	4・5歳	障害児
18	20	29	18	6

分科会の評価（人数）

たいへんよかった	よかった	どちらともいえない	よくなかった	まったくよくなかった
48	33	3	1	0

屋台村評価（人数）

たいへんよかった	よかった	どちらともいえない	よくなかった	まったくよくなかった
61	23	0	0	0

セミナーで日ごろの悩みに解決の方向が見えましたか？（人数）

具体的な解決方法は見出せなかったが元気をもらえた。	50
具体的な問題解決にヒントやアドバイスが得られた。	45
その他	3
自分の抱えている悩みを話すことができなかった。	2
問題の解決にはなんの役にもたたなかった。	1

セミナーの今後について（人数）

卒後3年目まででなく、もっと中堅・ベテランの参加を	43
もっと実技的なことをたくさん学べるように	39
ベテラン保育者の実践報告などていねいに報告してもらって学ぶ	30
もっと参加者自身の実践発表などとりいれて深く実践検討	16
今後は同窓生中心でなくもっと開かれたものに	14
講座の数を増やし、学外講師もよんでより専門的に幅広く学ぶ	14
その他	3

4 公開講座・シンポジウム

今年度は、シンポジウム「子育て支援サークル・ボランティア」の集いを開催した。

5 研究季報の発行

本年度から所員間の研究交流のために「研究季報」No.1～No.4を発行した。

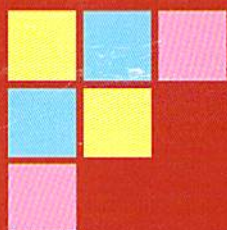
保育子育て研究所年報第5号 執筆者：50音順

神田 英雄 桜花学園大学保育学部 教授
大村 恵子 名古屋短期大学保育科 教授
小嶋 玲子 桜花学園大学保育学部 教授
清 葉子 相山女学園大学教育学部 講師
穴戸 洋子 名古屋短期大学保育科 教授
島田真由美 名古屋のぎく保育園 保育士
川元麻由美 名古屋けやきの木保育園 保育士
河野 彩 武豊町立中山保育園 保育士

編集責任 保育子育て研究所長

保育子育て研究所年報 第5号(2007年度)

発行者	名古屋キャンパス保育子育て研究所
発行年月日	2008年7月10日
住所	〒470-1193 愛知県豊明市栄町武侍48 名古屋短期大学内
電話	0562-97-1306
FAX	0562-98-1162
HP	http://www.nagoyacollege.ac.jp/
印刷	(株)シイエム・シイ



桜花学園名古屋キャンパス
保育子育て研究所

